

軽症うつ病

概念の明確化および診断基準の作成

東京大学大学院医学系研究科ストレス防御・心身医学

宮坂菜穂子・熊野宏昭・佐々木直・久保木富房

東邦大学医学部心療内科 坪井康次・端詰勝敬

日本大学医学部附属板橋病院心療内科 村上正人

背景

- うつ病は、近年、軽症化とともに患者数が増加していると考えられる。
- 「軽症うつ病」の定義はこれまでなく、漠然と使用されているのが現状である。
- 抑うつ症状を呈する患者は、専門の診療科以外にも受診する機会が多いが、「軽症うつ病」をうつ病の治療対象として見落とすことは避けるべきである。

目的

「軽症うつ病」を、DSM-IVにおける大うつ病性障害の軽症群および小うつ病性障害と捉え、中等症以上の群との間で出現症状の差異をみる。

「閾値下うつ病」の症状の特徴に関する過去の研究

友田 et al.	1997	閾値下うつ病群（大うつ病は含まない）では、うつ病群と比較して、睡眠障害・無価値感・自殺念慮の症状を呈するの割合が有意に少なかった。
Geiselman et al.	2001	閾値下うつ病群（大うつ病は含まない）では、大うつ病と比較して、身体症状の程度に関して差がなかったものの、抑うつ症状の程度は有意に低かった。
Hybels et al.	2001	CES-Dスケールにおける抑うつ状態の重症度は、身体愁訴の多さや身体機能低下の程度と関連がみられた。

大うつ病・小うつ病を対象として軽症群の症状の特徴を捉えた研究はない。

対象と方法

対象：東邦大学医学部附属大森病院、日本大学医学部附属板橋病院、東京大学医学部附属病院の心療内科外来において抑うつ状態を呈していた初診患者(N=50)

方法：DSM-IVに基づく診断、初診時の向精神薬服用の調査、および以下の質問紙を施行した。

- a. MINIをベースにしたうつに関連する簡易構造化面接
- b. Self-rating Depression Scale:うつ状態の評価

大うつ病性障害および小うつ病性障害の患者を選択し、「軽症うつ病」を「大うつ病診断項目該当数 <7 」と仮定し、中等症以上の群との間で、大うつ病各診断項目出現率、SDS総得点、自殺の危険性を比較した。

結果

	N	Age(y/o)
全対象者	50(M18/F32)	40 ± 16
疾患別		
大うつ病性障害	31	
気分変調性障害	3	
双極性障害	4	
特定不能のうつ病性障害	6	
うち小うつ病性障害	3	
その他	6	
解析対象者(大うつ/小うつ病性障害)	34(M 13 / F 21)	43 ± 16
軽症群	14 (M 6 / F 8)	42 ± 13
中等症以上の群	20 (M 7 / F 13)	41 ± 18

大うつ病診断項目該当数による各項目出現率

	項目数<7 (N=14)	項目数 7 (N=20)
1 毎日の憂うつ・沈んだ気持ち	57.1 * *	95.0
2 興味・楽しみの減少	85.7	95.0
3 毎日の食欲低下や体重減少	35.7	60.0
4 毎日の睡眠障害	50.0 * *	90.0
5 毎日の動作緩慢・落ち着き欠如	64.3 *	95.0
6 毎日の疲労・気力低下	92.9	100
7 毎日の無価値感・罪悪感	35.7 * *	95.0
8 毎日の集中力・決断力低下	78.6	90.0
9 希死念慮	21.4 * *	75.0

*:p<.05 **:p<.01

「大うつ病診断項目該当数 < 7」(軽症群)と 「大うつ病診断項目該当数 ≥ 7」(中等症以上の群)の判別

標準化された正準判別係数

憂うつ・沈んだ気持ち	.515
無価値感・罪悪感	.846

判別分析 分類結果	予測グループ	
	A	B
A 軽症群	11	3
B 中等症以上の群	2	18

85.3%が正しく分類された。

結果のまとめ

- 軽症群と中等症以上の群の間で、「SDS総得点」に有意な差はみられず(56.3 vs 60.7, $p=.057$)、全体で、「大うつ病診断項目該当数」と「SDS総得点」との相関も高くなかった($r = 0.39$)。
- 軽症群では大うつ病診断項目のうち、「憂うつ感」($p = .007$)、「睡眠障害」($p = .009$)、「動作緩慢・落ち着き欠如」($p = .021$)、「無価値感・罪悪感」($p = 0.000$)、「希死念慮」($p = 0.002$)に関連した項目で有意に出現率が低く、「興味の減少」、「食欲低下・体重減少」、「疲労・気力低下」、「集中力・決断力低下」で差はなかった。
- 出現率に差のあった項目のうち、「憂うつ感」・「無価値感・罪悪感」による判別分析では、重症度の判別率は85.3%であった。
- 現在の自殺危険性は、軽症群で有意に低かった($p = 0.031$)。

考察

- 軽症群でも高い出現率が得られた「興味の減少」、「疲労・気力低下」、「集中力・決断力低下」がみられ、かつ「憂うつ感・沈んだ気持ち」、「無価値感・罪悪感」がみられにくいことが軽症群の特徴といえる。
- 判別分析を参考にした重症度別うつ病の診断基準(案)
 - 第一段階：軽症以上のうつ病の診断を目的として、「興味・楽しみの減少」「疲労・気力低下」、「集中力・決断力低下」の3項目について聴取する。
 - 第二段階：中等症以上のうつ病の診断を目的として、「憂うつ感・沈んだ気持ち」、「無価値感・罪悪感」の2項目について聴取する。
- 軽症群および中等症以上の群の間でのSDS総得点に有意差は認められず、両者の相関も小さいことより、SDS総得点と大うつ病診断項目数は性質の異なるものといえる。

今後の課題

- 今回行った調査については、専門科においてさらに対象数を増やして軽症群の特徴を確認する。
- プライマリケア施設において、大うつ病診断基準項目の調査を施行し、軽症うつ病群・中等症以上のうつ病群・それ以外の疾患群の間で、出現する症状差異をみる。
- その結果に基づいて、プライマリケアで使用可能な「軽症うつ病」の診断基準を検討する。